

なぜ、共通語話者が方言を用いるのか

—メディア用東北弁が作り出すイメージ—

熊谷 滋子

1. はじめに

私は、『ことば』32号（以後は、前号とする）で、『徹子の部屋』コンサート（第4、5回）の中の、黒柳徹子と加山雄三による「東北弁トーク」に注目し、そこからにじみでてくる東北観、東北方言観をまとめた。しかし、書き終えてからも、共通語話者が東北弁を用いることに対する私の違和感を十分に説明しきれたとは思えないでいた。

東北は周知のように、特に明治以降、国家政策によって、中央・東京から周縁におかれてきた。標準語の制定にともなって、東北方言は特に矯正や撲滅の対象ともなり、方言コンプレックスをもつ東北人も少なくなかった。最近では、幸か不幸か共通語が全国的に限なく浸透してくるようになってきたことから、方言が逆に希少価値さえおび、尊重される傾向もある。しかし、東北方言に関しては、「田舎」イメージが色濃く随伴され、肯定的にも否定的にも受け取られている（井上ひさし 2010、井上史雄 1977a, b、佐藤 1996、田中 2011）。

そのように周縁化されている東北方言が、全国メディアで娯楽として、しかも共通語話者によって利用され続けている理由をあらためて考察するのが今回の目的である⁽¹⁾。まず、Hill(2008)の主張するアメリカにおけるMock Spanishという存在が今回の考察の重要な手掛かりとなるため紹介する。次に、その発想を全国メディアで用いられる東北方言の考察に応用し、「メディア用東北弁」として定義し、その記号的役割と言語的特徴を考察しつつ、「東北弁トーク」を分析し、メディア用東北弁が共通語話者に対して、さらには、東北方言とその話者に対して、どのようなイメージを作り上げているのか、考察する。

今回、分析対象にするのは、前号で扱った第4、5回（それぞれ、2010年、2011年に放送）と、東日本大震災後に開かれた第6回分（2012年1月8日放送）である（いずれも、テレビ放送されたもの）。したがって、前号と重複する部分が多々あることをあらかじめお断りしておきたい⁽²⁾。

2. ことばの横取り

まず、全国メディアで共通語話者が東北弁を利用する理由を考えるのに重要な視点を説明したい。それは、先に紹介したHill(2008)によるアメリカ社会における「Mock Spanish（以後、MSと略す）」の存在である。

2.1 「Mock Spanish」の持つ意味

Hill(2008)は、アメリカで用いられているMSの持つ意味を考察している。Hill(2008)は、「序文」で、執筆当時、自身が69歳であることをわざわざあかした上で、アメリカが、現在表向きには有色人種に対する差別がなくなったかのように思われているが、実は、日常のなにげない会話の隅々にまで、依然として人種差別的言動が根強くある白人中心社会なのだと嘆息まじりに述べている。周知のように、アメリカは、人種のるつぼといわれ、先住民以外に、他の地域から移住してきた人々が多くいるが、その中でも、メキシコ系アメリカ人をはじめスペイン語話者が多い。そのような状況を背景に、HillがMSについて指摘している重要な点は、MSを介して、ことばの上からも、スペイン語話者に対する差別があるとする点である。

MSとは、本来のスペイン語の中から、ごく限られた語彙や形態素を借用し、もとの意味を野蛮な意味を含ませて変え、文法的でもなく、アメリカ英語発音で、へんなアクセントをつけて話す、いわば、白人が都合よく改変したスペイン語のことである。特に、アメリカ英語しか話せない人が用い、同じことを言うにも英語で言うより、MSで言う方が、冗談ばくなったり、あるいは侮蔑的な意味が込められるという。そのため、Hillは、このようにふざけたり、見下しのイメージを持つスペイン語をMock Spanishと名づけたのだ。

MSの持つ意味作用には、肯定的なものと否定的なものがある。肯定的なも

のは、白人アメリカ人が使う場合である。白人アメリカ人がMSを話す時、彼らが単なるアメリカ人ではなく、好ましい人、くだけた気さくな人、ユーモアのセンスや都会的なセンスを持っている人とされる。一方、否定的なものは、本来のスペイン語やスペイン語話者に対するものである。まず、MSが横行することで、本来のスペイン語を周縁化し、秩序のないめちゃくちゃなもの、あるいは、非アメリカ的なものと貶めるのである。そして、メキシコ系アメリカ人に対する人種差別的なステレオタイプ（遅れている、信頼できない、なまけもの、汚い）をもとに、スペイン語話者に対して、不真面目、めちゃくちゃ、怠惰、野蛮というイメージを与えるのである。しかし、Hillによれば、ほとんどの白人英語話者はこの差別性に気づかず、彼女が講演などでこの点を指摘しても、考えすぎだと言われてしまうという。

これは、白人社会における言語間の序列をもとに、アメリカ英語がもつばら標準、規範とされ、スペイン語は下位に置かれてしまっているためである。そのため、スペイン語話者が正確なアメリカ英語ができなかったり、スペイン語発音で話したりすると、教養がないなど見下されるのに、アメリカ英語話者の方は、MSを堂々と使い、スペイン語もできると自慢する。喫茶店のスタッフとして働くとき、スペイン語話者の場合、思わず、スペイン語を口走ったりすると、上司に注意されたり、皿洗いにまわされたりするが、アメリカ英語話者の場合、MSを使っても何も問題とされず、むしろ自己アピールになっている⁽³⁾。

このように、MSのもつ差別性は、わが国の共通語中心社会における東北方言の社会的位置づけが反映されたメディア用東北弁にも通底しているようである。

2.2 メディア用東北弁の持つ意味

メディア(文学作品、ドラマ、翻訳作品、娯楽番組等)で用いられる方言については、それらの方言が実質的にどこの地域のものか特定できない、いわば架空のものという特徴をもっているため、「ニセ方言」(金水 2003:56)、「擬似方言」(中村 2007:53)、「ヴァーチャル方言」(田中 2011:4)などと名づけ

られ、分析されてきた。今回は、それらを念頭に、メディアに典型的に登場し、東北方言もどきといてもいいような色彩の濃いものを特に、「メディア用東北弁」と名づけ、そのことばのもつ記号的役割や言語的特徴をまとめていく。言語的特徴については、3で具体的に扱う。

メディア用東北弁は、あえていえば、東北地域で実際に使用されてきた多様で豊かなことばとは違い、中央・共通語中心社会において、都合のよいところだけを恣意的に抜き出して作った、パターン化した表現のことをさす。前述のHillのいうMSの発想にあてはめて推測すると、メディア用東北弁は、肯定的な側面と否定的な側面を持つ。共通語話者が用いる場合は、肯定的なイメージを与え、一方、本来の東北方言やその話者に対しては周縁化するため、田舎を典型とする否定的なイメージを与える。これらのイメージの検証は、3.1で行う。

また、共通語には、女らしさとかかわる「女ことば」が、特にメディア上では使われているため、女性がメディア用東北弁を用いると、女らしさから程遠い存在としても強く表象されてしまう。

さらに肝心なことは、共通語話者がメディア用東北弁を用いても、Hillが指摘するように、自身が否定的イメージを負うこともなく (Bucholtz and Lopez 2011)、そのことにより付随する差別性に気づくこともない。そういう点から、MSの場合と同様に、これは、共通語話者による東北方言の横取り (appropriation) ともいえるだろう (Hill 2008:158-161)。このような横取りの利用は、東北を周縁化するような中央・共通語中心社会が存続していく限り、行われていくものであろう。

3. 分析

『徹子の部屋』コンサートと、その中の「東北弁トーク」の概要については、前号で紹介しているので、詳細は省くが、「東北弁トーク」は、東京を拠点に俳優、歌手、タレントとして活躍してきた大スターであり共通語話者である黒柳徹子 (1933年東京生まれ) と加山雄三 (1937年神奈川生まれ) が東北方言でトークするコーナーである。このコンサートは、『徹子の部屋』放送35

周年を記念して、続けられているもので、毎回、4～6組のゲストが招かれ、それぞれ歌や演奏のパフォーマンスをした後、ホスト役の黒柳とトークをする。ちなみに、東北弁トークの時間は、第4回は7分、第5回は8分、第6回は3.7分であった。前号では第4、5回を対象としたが、今回は、第6回を含めて、あらためて分析しなおす⁽⁴⁾。

3.1 東北弁トークの効果

前号(2011:104-105)では、第4、5回の東北弁トークに共通するものとして、加山の体調のこと(じんましんになった話や健康法)や家族のこと、そして青森のラーメン屋で体験した笑い話などきわめて個人的なことが中心で、「普段あからさまにはいえないことが語られ」、「このような話題をそのイメージにマッチしているような東北方言で語るのも、(中略)東北方言と都会の大スターとのイメージギャップが功を奏し、トーク番組として一定の効果を生んでいる。東北方言を利用して興行的には成功している」と指摘しておいた。しかし、そこでの東北観、東北方言観は、「田舎、乱暴、雑、不潔、糞尿譚的なイメージ」をもつものとなっているとまとめている。

前号のまとめをHi11のMSをめぐる主張にそってとらえなおし、メディア用東北弁の持つ肯定的な側面と否定的な側面を、私が行ったアンケート調査から読みとってみたい。この調査は、2011年から2012年にかけて、静岡大学の学生(1～4年生の137名)に行ったものである⁽⁵⁾。大学生に、東北弁トーク(第4、5回)を視聴してもらい、語り手のイメージがどうなのか回答してもらい、それに加えて、東北弁に対するイメージについても自由に書いてもらった。

まず、肯定的なイメージについては、男女ともに、特に加山のイメージが変わったとする学生の割合が7割にのぼり、その具体的なイメージは、たとえば、「昔のスター、堅物、がanko、真面目、かっこいい、恐そう、きつい」といったものから、「田舎など、どこにでもいる、ごく普通の、面白く、親しみのもてる、あたたかみのあるおじいさん」といったものになったと回答している。黒柳に対しては、イメージが変わったとする学生が36.5%、変わら

ないとする学生が35.0%で、前者が後者を1.5%上回っただけである。黒柳は、加山よりも、『徹子の部屋』を含め多くのテレビ番組に出演しているため、若者の間にも、すでにその強烈なイメージができあがっているせいだと思われる。とはいえ、変わったとする学生の感じるイメージは、たとえば、「お堅い、お高くとまっている、冷たい」ものから、「気さくな、面白い、親しみのわく、人間味のある」ものになっている。今回、20歳前後の若者にしかアンケート調査を行っていないが、70代の年配スターが、このようなトークによって、若者にも好感をもたれるようになったということは、娯楽番組で、共通話者が、メディア用東北弁を用いることが有効であることを示している。

一方、今回の調査からみえてくる、否定的イメージについてみる。この番組における東北弁自体のイメージは、「やさしい、柔らかい」というものもあるが、「田舎くさい、片言のような感じ」という否定的なものがあり、「なまりが強いところだったりすると東北弁」といった、東北弁が田舎の方言の代表と感じている学生も少なくなく、東北弁のイメージはあまりよくないようである。

黒柳は、この否定的イメージに気づいているせいか、東北弁トークにおいて、ゲストの加山のイメージを悪くさせないようにフォローする場面がある。例えば、第4回で、加山が青森で出会ったラーメン屋のおばあさんにまつわる笑い話をした後、黒柳が、「若大将って紹介されてるのに、そんな話して、でも幻滅とは思わないよ、みんな、あの人は面白い人だなんて思うから」と、イメージが悪くならないようにフォローしている。第5回では、黒柳は、加山の父（往年の二枚目スター、上原謙）が役柄を広げるために東北弁を学んだが、二枚目のせいで、そのような役が一回しかこなかったことを紹介し、加山がトークで東北弁を使っても大丈夫なのは、（顔が）「ぐちゃぐちゃ」だからと笑わせながらも、その直後には、加山が「英語の歌を歌える」と、外国語ができることをわざわざ紹介するのである。東北弁の使用によって、加山の都会的で知的な大スターとしてのイメージが汚れてしまわないよう、黒柳が気配りをしているように感じられる。

3.2 話題と言語の相関関係

ここでは、トークの話題と使用されたことばの関係をみる。トークは、即興的なもので、事前に綿密に計画しているわけではない(らしい)ので、ことばのイメージを瞬時に見極め、そこでの話題にふさわしい使い分けをしているようだ。なお、誤解のないように付言しておけば、東北弁トークは、トークの最初と最後の締め括りの部分は共通語でやりとりしており、すべてが東北弁で行われているわけではない⁽⁶⁾。

最初の部分では、加山の歌のすばらしさや加山が歌った歌 (*My Way*) の誕生秘話などが共通語で語られ、トークの最後も、加山への感謝のことばが共通語でなされる。いわば、加山の歌に関わる仕事・専門の話が中心である。たとえば、「ますますもって、すばらしい歌手におなりになるのは驚きますね」(4回)「それにしてもあなたはいい声なんで驚きますね」(6回)と、黒柳が丁寧な共通語でほめている。

一方、3.1で述べたように、加山をめぐる個人的なことがら、どちらかという公的な場で言いにくいものが、メディア用東北弁で語られる⁽⁷⁾。ただし、3・11後の第6回では、被災者のことが中心に語られる。具体的に内容を紹介すると、加山はこれまで海をテーマに歌ってきたため、歌うのをためらっていたが、被災者である漁師たちが海が悪いわけではないと語る映像をみて、涙が出てきたこと、そして、黒柳も、同様の手紙をもらったことを紹介している。つまり、第6回では、4、5回と違い、笑いをとらないような配慮をしている。しかしながら、黒柳の青森での疎開話には、4、5回と共通している点がある。栄養失調で、頭にシラミがたかっていたのを、知らない女性にとってもらったという思い出話をしているのだが、(田舎の代表としての)青森という地名と、「シラミ」という不潔なものを口にしていることである。3・11後であるため、不用意なことばを控えていることは伝わってくるが、思わず、口に出てしまった東北観ではないかと思ってしまう。

興味深いこととして、ホスト役の黒柳が、共通語から東北弁に切り替える際、急に声の調子を変え(おだやかでなめらかな口調から、ゆっくりめで、たどたどしく大声で)、くだけた調子で語りはじめるため、それまで丁寧な共

通語を用いていただけに、余計、東北弁がひどく乱暴なものだというイメージをもたせてしまっている。以下に切り替え前後の黒柳の語りを示す。

(下線部分がメディア用東北弁である。)

「ちょっと東北弁でやらせてもらおうかと思ってんだけども、おめえがさ、今、実は来たとき」(4回)

「いつも、私とあーたは東北弁しゃべるので、(中略)せっかくだから、まー、東北弁がいんでねーがって、思って、あたすもこんなあだまして、東北弁しゃべってどうするんだって、思ったけど」(5回)

「本当は東北弁でお話をするところなんですけど(中略)わだしたちは、東北がすぎだから、東北の話をしてもいんだけども」(6回)

テレビ番組『徹子の部屋』や、コンサートで他のゲストとトークをする時は、黒柳は丁寧な共通語、または、「女ことば」を使っている。東北弁トークでのみ、このような語り口をするのである。さらに、加山の方は、一貫して東北弁を用いているのに対し、黒柳の方は、観客に向かって話すときは「女ことば」になったりするなど、東北弁を部分的にしか使用せず、また、使用するときは、大げさな調子で話しているのが特徴的である。

3.3 メディア用東北弁の言語的特徴

ここでは、東北弁トークで用いられた「メディア用東北弁」の言語的特徴をまとめる。大まかに4つの特徴がある。

1つめは、全国レベルでよく知られた、ごくわずかな東北方言をピンポイントで強調して用いている点である(以下、例は、カッコ内に示す)。音でいえば、語中や語尾の力行音・タ行音の有声化(あだま(頭))、中舌母音化(あたす(あたし))、口蓋化(ちいてたら(聞いていたら))、二重母音の長母音化(はえー(速い))や融合化(おめ(おまえ))などである。形態素や単語については、東北方言特有のものは使われていない。この点で、方言のもつ語彙の豊かさが伝わらず、狭く限定されてしまうことになる。

自称詞については、東北方言でよく用いられるのは「おら」や「おれ」であるが、トークでは、加山が「おれ」、黒柳が「わたす」(わたし)を用いる程度である。加山の「おれ」について、共通語では男性専用であるため、特に方言として用いているわけではないと解釈できそうだが、第6回において、加山は被災者のことを「おれたち」、自身を「僕」として、自分が共通語話者であることを、自称詞を通して伝えているので、一連のトークでは方言として「おれ」を用いていると思われる。黒柳の方は、「おら」「おれ」を一度も使っていない。女性の共通語話者にとって、これらの語彙は、田舎や男らしさをイメージさせるものと感じられるためだろう⁽⁸⁾。

助詞については、東北方言としてよく知られたものが使われ、具体的には方向を表す「さ」(青森さ行く)、目的語を強調して表す「ば」(水道の蛇口ばひねる)、意志・推量・勧誘を表す終助詞「べ」(行くべ)が用いられている。加山は、東北弁をかなりうまく使いこなしているようにみえるものの、「さ」を主語や主題を表す場合にも応用し(エネルギーさわいてくる、海さ、おれ好ぎだし)、本来の用法からずれた使い方をする場合もある⁽⁹⁾。

以上、音、語彙、助詞レベルでは、東北方言に特徴的なもののごく一部を強調して用い、しかも、本来の使い方ではなかったり、あるいは、使うべきところに使われていなかったり、一貫性にかけることがあるのが特徴である。

2つめは、東北方言と勘違いされ、田舎ことばとして流通している文末詞「だ」の使用である(かいーだ(かゆい))。これは、特に中部方言に特徴的なものだが、いつのまにか、東北方言と思われるようになったものである⁽¹⁰⁾。

3つめは、丁寧でない、くだけた共通語とともに用いられているということである(おめ、何くった?(あなたは何を食べたのか)、はらこわした(お腹を下した))。方言は、特に東北方言は、共通語に比べ、敬語や丁寧な表現があまりないとされているが、東北方言にも敬語や丁寧表現がないことはない。しかし、それが、共通語中心社会では無視されてきたか、よく知られていないため、方言というと、くだけた共通語の延長線上にあるものと思われがちである。

4つめは、話す速度と声の調子である。3.2で述べたように、普段、立て

板に水で、早口ぎみの黒柳が、東北弁トークになると、ゆっくりめで、ぶっきらぼうに大声となり、イントネーションも、極端に上下させて話すので、共通語に比べ、おどおどして、乱暴な印象を与える。ちなみに、今回のトークは共通語話者どうしによるものなので、それほどでもないが、テレビドラマなどで東北人という設定のキャラクターが登場すると、きまって、口が重かったり、たどたどしく、あるいは、しゃべらないでいるシーンが多く、東北人は寡黙で朴訥といったイメージが作りあげられている⁽¹¹⁾。

以上が、今回のトークにみられるメディア用東北弁の言語的特徴である。東北地域で実際に用いられているのが本物で、今回のトークのものがにせものということの問題にしようとしているのではなく、今回のトークで使われたようなメディア用東北弁が、全国メディアで、笑いをとったり、「田舎っぺ」丸出しのキャラクターとして用いられることで、東北、東北方言とその話者に対するある一定のステレオタイプを広く社会的につくりあげているということを描きたいのである。ある形式（ことば）がある文脈で使われていくことで、その形式があるイメージをもち、はては、文脈なしでも、そのイメージが一方的に喚起されてしまうことになる。全国メディアで用いられる場合、東北方言に限らず、他の方言が使われた場合についても、このようなことがあてはまるのではないだろうか。

3.4 第6回の東北弁トークの特徴

最後に、2011年3月11日におきた東日本大震災の後に開催されたコンサートにおける東北弁トークの特徴について考える。前号でも触れたが、第6回のコンサートの前の『徹子の部屋』⁽¹²⁾で、加山と黒柳は東北弁でのトークはしないと確認していたものの、実際は行った。東北弁トークの最中のテレビ画面には、「東北弁で日本に元気を」というテロップさえつき、復興支援の一環であることをアピールしている。

しかし、第4、5回のように、無邪気に東北弁を使える雰囲気がないことが、以下の、黒柳の東北弁への切り替え部分にあらわれている。

「いつもだと、わたしもあなたも東北が好きなので、ここで本当は東北弁でお話をするところなんですけど、いえ、そんな、いや、まー、そりゃね、わだしたちは、東北が好きだから、東北の話をしていいんだけど、まー、東日本でみんながね、苦労してるどぎに、まー、ちょっと、お遊び半分にかがれでも、どんなもんかなと思うんだけど」

この切り替え部分について気づくことは、まず、1つめに、東北弁に切り替える直前の、点線部分は、その前の発話に対して観客からの拍手が起きたのに反応したものであることだ。東北弁トークは、好き勝手にやっているのではなく、観客の期待に応えてのことだということを、このようなフィラー的表現を用いて示そうとしている（「まー」というフィラーが、その後も2度挿入されている）⁽¹³⁾。しかし、そのような期待はあるものの、3・11後であり、被災者のことを考え、「遊び半分」ではいけないと、むしろ観客の姿勢に注文をつけている。これは、東北弁トークをする側が、聞く側にも注意を向けることで、配慮していること（ふり）を伝え、自らを免罪しているようにも聞こえる。

2つめに、東北弁トークをする理由として、「東北が好きだ」と2度も繰り返している。それだけ強調しなければならないほど、ためらいがあるのだろうか。そういつつも、上の発言の後に、黒柳が加山に対して、東北弁でトークするように促す。

黒柳「あんたもちょっと話したら、東北弁できんだから」

加山「え、そりゃー、いんだろうか」

黒柳「いーんだろう。いーんだろう」

加山は、ためらっていたが、黒柳に促されるように、東北弁でトークしはじめる。加山が「いんだるか」と問いかけているのに対し、黒柳が「いーんだろう、いーんだろう」と、おどけた調子で二度繰り返し、加山が東北弁を使えるようなムード作りをしている。ただし、第4、5回と違い、東北弁の

うまい加山でも、東北弁はあまり使用していない。

加えて、第6回の東北弁トークにかかわって、方言間の序列もかいまみえてくることを指摘しておきたい。それは、先にあげた『徹子の部屋』で、黒柳は、神戸でもコンサートが予定されていることを紹介し、関西弁でやってみようかと提案するものの、結局、「気持ち悪い」といわれるからやめることにする。田中(2011:253)は、関西方言母語話者の前で、一般に関西方言を使うのは、はばかれるということを述べている。黒柳のコメントは、黒柳個人の感覚ではなく、日本人全体の意識を代弁しているといえる。また、このことは、第6回で、加山の次のゲストとして登場した綾戸智恵(大阪府出身)が、関西方言でトークをしているのに、黒柳は共通語でしか対応していないことから裏づけられる。3・11後、東北弁トークをめぐり、東北方言と関西方言には、配慮に差のあることが、より明らかにされたように思われる。

ちなみに、全国メディアでは、特に関西出身の芸能人は、明石家さんまや久本雅美などに典型的にみられるように、関西方言をくったくなく使っているのに対し、東北出身の芸能人は、冗談まじりに部分的に使うことはあっても、一般的には使用しない。このことも、方言間に差があることを示している。

4. おわりに

前号でもとりあげたテーマを今回も考察したため、重複している箇所が多々あったと思うが、いずれにしても、中央・共通語中心社会である今日の日本において、メディア用東北弁は、3・11後でも、共通語話者にとって、自己アピールに有効な言語資源として使われていることが、今回の一連のトークから、いみじくも証明された。このことは、他の方言についても十分にあてはまるものだろう。今後も、メディアにおける方言利用について、その機能のありようをチェックしていきたい。

注

(1) 前号でも説明したが、これは言語越境 (language crossing) である。Rampton(1995)

に詳しいが、マジョリティ側が、文化の享受や既存文化への抵抗など様々な目的のために、マイノリティ側のことばを一時的に用いることである。日本語の他の例では、男性が、いわゆる「女ことば」を使って、自己アピールする場合があてはまる。

- (2)前号でも述べておいたように、本稿でも、「東北弁トーク」を行う黒柳徹子氏と加山雄三氏を個人的に非難することが目的ではないということもお断りしたい。
- (3)他の言語でも、共通語・標準語話者が方言を用いると、自己アピールになるが、その逆はないと指摘されている(Bourdieu 1994, Chun 2004)。
- (4)第6回は、2011年11月に収録したものを、翌年の1月にあさひテレビで放送したものである。第6回のゲストは、出演順に、加山雄三、綾戸智恵、南こうせつ、仲代達矢と圭吾(兄弟)、森山良子、三人娘(伊東ゆかり、中尾ミエ、園まり)である。前号でも指摘したが、主に高度経済成長期において活躍した歌手や俳優が中心で、懐メロ的なものである。
- (5)アンケート調査は、2011年6月13日(71名)と、2012年6月19日(66名)に実施した。
- (6)以下の表に、使用されたことばと話題について、まとめる。

使用されたことば	第4回	第5回	第6回	話題の特徴
(丁寧な)共通語 (黒柳の場合は、「女ことば」も含む)	・加山の歌への称賛 ・歌「 <i>My Way</i> 」の誕生秘話	加山への称賛	加山の声への称賛(TUBEとの共演)	<最初> ・専門的な話 ・称賛
	加山への感謝	加山への感謝		<最後> 感謝
メディア用東北弁 (主に加山の話 題)	・体調不良(じんましん) 「大腸菌」 ・青森の笑い話 「腱鞘炎には指をケツの穴につっこんで温めると助言」 ・孫との交流	・東北新幹線「青森・八戸まで開通」 ・加山の父の再婚「加山の娘より若い相手」 ・加山の父の東北弁秘話 ・健康法 ・趣味の絵 ・孫との交流	・被災者の思い ・支援 ・黒柳の青森での疎開話「シラミ」	個人的・身体的な(不潔、下世話な)面白い話や思い出話

- (7) 先にあげたアンケート調査において、「なぜ方言を使い出すと下品な話になったのか」とコメントし、話題と方言の密接な関係を見抜く学生もいる。
- (8) 井上史雄 (1977a, b) の高校生を対象にしたアンケート調査では、東北弁が若い女性にはふさわしくないという結果がでている。また、福島県立南会津高校の生徒が製作したビデオで『オレオレ詐欺! ?』2007年8月13日NHK教育で放送、約8分)、女子高校生が自称詞「おれ」を地元でも使いにくくなってきた状況をまとめている。
- (9) これらの例では、「さ」は使えない。これらを、東北方言でどう表すかということについては、東北方言といっても地域差があり、一つにしぼることができないが、一例として示せば、「エネルギー、わいでくる」「海は一、おれ好きだし」という言い方ができるだろう。
- (10) 都川(1994)は、翻訳作品で使われる助動詞「ダ」の拡張用法(例、行くだ)を分析し、「東北地方の外で広く行われているもの」なのに、そのイメージは東北弁のもの(マイナスイメージ)と受け取られている可能性が高いと指摘している。
- (11) ここであげた4つの特徴に加え、他の地域の方言の特徴をもつものが混じっていても、東北方言だと判断される傾向にあることも指摘しておく。2011年4～5月に静岡大学の学生109名(うち、中部地域出身者が68%を占めている)を対象に、有名なアメリカ文学の翻訳作品である『ハックルベリー・フィンの冒険』(石川欣一訳、研究社、1958年)から、黒人ジムの会話部分の一部を抜き出し、方言だと思うか、さらに、方言だと思う場合、どの地域の方言だと感じるのか、アンケート調査を行った。詳細は省くが、中部方言に特徴的な「ずら」が使用されている箇所を対象にしたものでも、54%が東北方言と感じているという結果が得られた。ちなみに、中部方言と感じた学生は、23.8%であった。
- (12) 2011年7月18日、あさひテレビで放送されたものである。ゲストに加山雄三が招かれ、番組の最後に、その後予定されている東京と神戸でのコンサートのことを話題にしていた。
- (13) 小林(2011:118)では、発話中のマー型のフィラーは、間つなぎ語として機能し、発話の主張を和らげる機能があると指摘している。黒柳は、この短い間に、3回も「まー」を挿入しているが、東北弁をこのように用いることに対して、和らげの気持ちがあつたことかもしれない。

参考文献

- 井上ひさし(2010) 『吉里吉里人(上・中・下)』新潮文庫
- 井上史雄(1977a) 「方言イメージの多変量解析(上)」『言語生活』311 pp.82-91 筑摩書房
- 井上史雄(1977b) 「方言イメージの多変量解析(下)」『言語生活』312 pp.82-88 筑摩書房
- 金水敏(2003) 『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店
- 熊谷滋子(2011) 『『徹子の部屋』コンサートにおける東北観』『ことば』32号 pp.97-108
現代日本語研究会
- 言語編集部(1995) 『言語別冊 変容する日本の方言』大修館書店
- 小林美恵子(2011) 「授業談話データベースによる実態調査—フィルターの様相—」『ことば』
32号 pp.109-122 現代日本語研究会
- 佐藤和之(1996) 『方言主流社会』おうふう
- 田中ゆかり(2011) 『「方言コスプレ」の時代』岩波書店
- 中村桃子(2007) 『<性>と日本語』NHKブックス
- 毎日新聞社(1998) 『東北「方言」ものがたり』無明舎出版
- 都川典子(1994) 「翻訳に見る方言イメージの活用技法」『東京女子大学言語文化研究』3
pp.90-101
- Bucholtz, M and Q. Lopez(2011) Performing blackness, forming whiteness: linguistic minstrelsy in Hollywood film. *Journal of Sociolinguistics* 15/5 pp.680-706.
- Bourdieu, P. (1994) *Language & Symbolic Power*. Oxford: Polity Press.
- Chun, E. (2004) Ideologies of Legitimate Mockery: Margaret Cho's Revoicings of Mock Asian. *Pragmatics* 14:2/3 pp.263-289.
- Hill, J. (2008) *The Everyday Language of White Racism*. West Sussex: Wiley-Blackwell.
- Rampton, B. (1995) *Crossing: Language and Ethnicity among Adolescents*. London: Longman.

(くまがい しげこ・静岡大学)